

## 日本切手にまつわる2つの話題

平 岩 道 夫 (切手評論家)

## ▶郵便は“たれべん”？

日本切手の生みの親は前島<sup>ひそか</sup>密。彼の肖像を描いた日本の切手も少なくないので、切手に関心を持つ向きは、ご存じのはず――。

ところで、おなじみの赤い郵便ポストは、初期のころ珍談、奇談が続出した、と前島密の『郵便創業談』で明らかにされている。

そのなかから、珍談を拾い出してみよう。

当時、郵便という文字は、一般の人には読めなかったらしく、東京見物に出てきた人が、1972年(明治5年)に初めて街角にたてられた<sup>ちようかん</sup>柱函(いまのポスト)を見た。それには白字で“郵便”と書かれ、ふたの部分に“<sup>さし入れぐち</sup>差入口”と書いてあった。

その人は“郵”という字の左側が“<sup>たれ</sup>垂”であるために“郵便”を“たれべん”と読んで、トイレと間違えた。それにしても、差し入れ口が小さいばかりか、位置が高すぎるので「これは日本人向けではなく、外人のためのものに違いない」とつぶやいたそうだ。

またポストを小便箱と間違えた人が、その中に用をたした、といった話などがある。

1888年(明治21年)、ポストの形を円筒形にし、赤く塗ったのも、実は前島密の発案だった。

## ▶飛べない“キジ切手”？

日本の切手の中に、“航空切手”と呼ばれるものがある。



1929年(昭和4年)の航空郵便制度の制定実施にともない、内地相互間と、内地＝朝鮮間の航空郵便用として発行されたのが、そのはじまりだ。

1938年(昭和13年)には、速達郵便制度が実施されたため、一時廃止されたが、戦後再び内外国用を発行。しかし国内用は、速達郵便制度の改革で廃止され、外国用だけになった。

戦後――正確に言えば、1950年(昭和25年)1月10日、国鳥のキジを描いた16円、34円、59円、103円、144円の5種の航空切手が発行された。

だがこの切手を見た専門家たちは、「このキジは飛べないよ。羽の格好がおかしい」といい出した。図案はキジが草むらからパッと勢いよく飛び出したところ。調べてみると、このキジの図案は東京の井の頭公園で写した写真を参考に描いたものだった。

問題は撮影の際、地上にいたキジの羽を<sup>さかて</sup>逆手に押し上げたことから、おかしいことになってしまった。

やはり専門家の目はごまかせるものではない。